

ふくしまキッズ  
夏季林間学校  
活動報告

# 子どもたちを守る

SAVE THE CHILDREN SAVE THE COUNTRY

福島の子もたちを、北海道の大地と人々が抱きしめる。  
その試みに、日本だけでなく海外の多くの人々が賛同して支援する。  
2011年の夏は、人々が人々の力でささえあう  
「ふくしまキッズ夏季林間学校」が始まった年。  
自分たちの社会の子もたちを自分たちでささえる、  
自分たちの力で故郷を見つめる。  
私たちは誰かに文句を言うだけでなく、子どもたちを「守り」「育み」  
そして「明るい未来」を手作りすることにした。

#000  
2011年  
10月2日号

平成23年3月18日(金) 大船渡市立第一中学校 学校新聞「希望」

# 希望王 何でもやります

起るは日本大震災とそれに続いておしよせた大津波により、大船渡市は大変な被害を受け、高田市も壊滅状態になりました。家族が離れ離れで、また見つからない方も多く、命に代わっています。

比較的被害の少ない猪川・立根地区では、少しづつ普通の生活を取り戻しつつありますが、赤崎、盛地区などは全く生活の見通しが立たないままです。

このように緊急事態の中で被災一中生に何か出来るのか、何とかしてあげたいのか、と考えています。皆で力を合わせていきたいと思えます。

平成23年  
3月18日(金)  
大船渡市立第一中学校  
学校新聞「希望」  
生徒会 有志

私達に出来る事は、も限られていますが、水くみ・トイレ掃除・おつかい、何でもします。一中生に声をかけて仕事をさせて下さい。

特に、老人の方は健康被害や住所の一中生に声をかけて下さい。

新聞と紙と内陸の中学生や高校生の生徒さん方が募金活動を始めたようです。テレビを見ても、自分達がやろうとしたい、一人ではできないと思っただけの協力する、って、くれなす。私達も、そんな事で、私達も、けたら、いいです。助け合いたい!!

手をこまねてはいけません。そんな私達の思いが皆の希望になればいいと思えます。

今、自分たちに何ができるか考えましょう。そこで、分りなけれは、ご近所の方にこちらから声をかけて、できることはないか、聞いてみましょう。

例えば、  
●川から水をくむ  
●お買い物のおつかい  
●にもつはこぎ  
●灯油はこぎ

今こそ出番だ!! 一中学生!!

●ひなん所での役に立つ  
●できることは、なげ、やります。たくさんあります。そして、たくさん、この活動を続けましょう。

これからの地帯をつくっていくのは、あなただ! ということを忘れずに生活していきましょう。



大船渡市立第一中学校の生徒有志が作った、学校新聞です。被災地の子どもたちが自分たちの力で地域をささえようという気持ち。子どもたちの手で子どもたちを守ろうという自立心に心をうたれます。大人は、こうした子どもたちの勇気と熱意をうたいたいものです。



## みんなでも子どもたちを守ろう!! 育つための場を作ろう!!

### 子どもが育つ場所

言葉というものは不思議な力を持っています。世の中には言葉が少し違っただけで、まったく違ったイメージを相手に与えることもあります。「子育て」という言葉もその一つで、それを「子育て」とするとイメージが変わります。

特に、「自分の時間」「休めから学ぶ時間」として子どもたちが群れて育つ「豊かな時間」としての「子育て」のどのよう確保するかということを考えている必要があります。

夏休みや冬休みのように長期の「放課後」における自然体験、日中に子どもたちと与えられている放課後における社会体験や生活体験が以前のようにできなくなってきた現代社会。子どもたちの豊かな成長のために「子育て」の場を大人は用意する必要があります。



### 子どもは社会の絆で育てる! 日本をそういう国にしませんか?

これまでの日本社会では、「子どもは親が育てるもの」という意識が強くあり、その結果、保護者に経済的・社会的な負担をかけるようになってきた。しかし、子どもたちは私たちの社会の未来そのものであり、社会の宝なのです。そのためには、「子育ては公共的なこと」とすべきです。社会全体で子どもたちの「学び」と「育ち」を応援する、それが私たちの社会の最も重要な課題である、私は思っています。

子どもたちは自立して社会に旅立ち、やがて社会に貢献する人となります。そうした自立した人間になるためには、豊かな育ち、そして充実した学びが必要で、そのためには放課後などで友達とともに過ごし、自然体験活動などに参加して、自身の興味関心を満たしてもらうために使ってもらい、子どもが社会で生きるための力をつけてほしいと思います。

これからの私たちの目指す方向は決して物質的に豊かになるということではありません。まさに人と人との絆、人と自然との絆というものを捉えなおすという幸福の再定義ということが必要です。そういう意味では、自然の中に存在する人間、そして人間同士、人間と自然との共生というこの意味を、物質文明、GDP至上主義の次にある、本当の人間の幸せとはなんなのかということ、私たちはもう一度考え直す必要があると思います。

それは自然を破壊し人工物をほとんどほとんど積み重ねて、それを大量にエネルギーを使い大量に消費するという文明ではないはず。人間の幸福とは何なのかということまで立ち返った、本格的なポスト近代の歴史づくりというものは、私は、社会全体で子どもたちの「学び」と「育ち」を応援することからはじめようと思っています。



「1日1日かかるとして車の上で遊ぶこともできないのが」。約3週間の滞在を経て福島市に帰郷する前日の8月11日、小学6年生の板垣文君(12)は、親を呼びながら話した。被災して、避難生活を送る日本大震災、そして、福島第一原発事故。あの日から5ヶ月が経過していた。「福島では公園も立ち入り禁止だった。マスクを着けても遊べない。北海道は楽しかった」と口にした。この夏、福島の子どもたちを対象に放射線からの解放を目的としたさまざまな支援活動が全国各地で行われた。中でも「ふくしまキッズ夏季林間学校」は、いち早く始動した大規模の事業。放射線に対する強い懸念を持つ保護者の関心も高まり、参加者は当初予定の2000人から約4800人まで膨れあがった。

実行委員長の高士敏さん(55)は福島県飯沼村、NPO法人ふくしまエクスネット理事長。彼は「8割の子は、親に誘われて参加した。本当に来たかった子は少ない」と話す。1〜5週間と滞在期間の違いはあるが、道内各地の海や山

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

でさまざまな体験をした。「研習」以外で遊ぶ喜びを知った子どもたちは、次第にその気になり、本気になり、「子どもたちの笑顔が何よりの成果だ」。

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

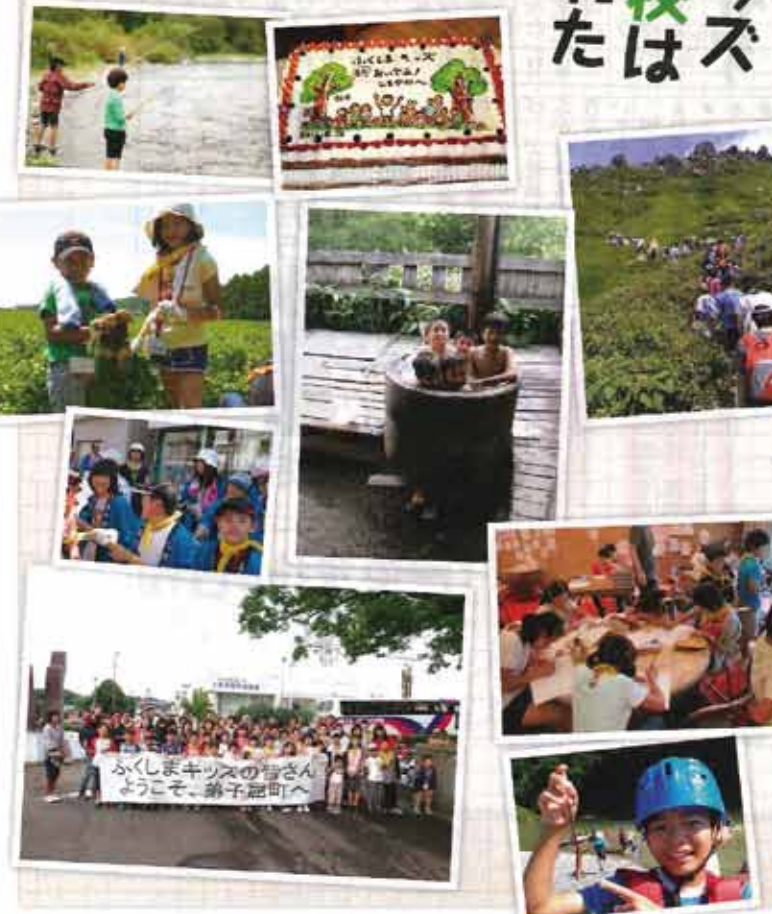
「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を

「ふくしまキッズ」夏の夏上」  
放射線に負けない力を



# ふくしまキッズ 夏季林間学校はここで行われた

STILL DAY ONE  
地域と地域がささえあう。被災地との連携ですめる。実際にやるとなると「調整」「連絡」「資金」「準備」「人手」……大変だ。いままでも自然教室事業で培われた「ささえあい」のネットワークが、「ふくしまキッズ夏季林間学校」の実現に大きく関わっている。NPO中心の連携と連帯を続けていきたいと思います。STILL DAY ONE (まだ物語は始まったばかりです)



- ### ●ふくしまキッズ夏季林間学校事業の概要
- 5月17日 第一回実行委員会で基本計画を決定し、事業活動を開始する。
  - 6月8日 福島県庁と北海道庁で記者会見を行い、ホームページから参加者募集受付開始。受付開始直後に定員200名を超過したため、急遽実行委員会を開催し、追加募集の発注の検討を開始。
  - 6月17日 北海道庁、七飯町の支援が決定し、50名の追加募集として第二次募集を開始。
  - 6月20日 文部科学省記者会見室で会見を行い、全国への支援の要請に入る。
  - 6月30日 外国人記者クラブで会見を行い、海外に向けた支援の要請を行う。
  - 7月1日 海外からの支援が決定し、300名の第三次募集を開始する。
  - 7月8日 北海道各地からの支援の申し出を受けて、第三回実行委員会を全庁計画を修正し、北海道各地での活動計画を決定する。
  - 7月10-11日 福島県3地区(福島・郡山・いわき)で参加者への説明会を開催。
  - 7月17-19日 関係地区でボランティアへの説明会を実施。
  - 7月20日 北海道・大沼に現地運営本部を開設。第一陣Aコースの子どもたち211名とCコース32名が北海道へ出発。ふくしまキッズ夏季林間学校がスタート。
  - 7月25日
  - 8月1日 第二陣Bコースの子どもたち275名が北海道へ出発。北海道各地へ移り出発。同日にA1コースの子どもたち52名が福島へ帰郷。
  - 8月8日 A2・B2・Cコースの子どもたち596名が福島へ帰郷。
  - 8月12日 A3・B3・Cコースの帰郷組の子どもたち129名が福島へ帰郷。
  - 8月20日 A4・B4コースの子どもたち192名が福島へ帰郷。
  - 8月25日 最後に残っていたA5・B5コースの子どもたち45名が福島へ帰郷してふくしまキッズ夏季林間学校の活動が終了。
  - 8月30日 北海道・大沼の現地運営本部の解散を完了。

また浦河で会いましょう  
行々ふくしまキッズ(お母さん)



## また参加したいと娘は目をキラキラさせています。

りゆうとゆうかママ

心配しましたが子供の成長を感じているところです。放射線から逃がしたい気持ちだけでバタバタと決めて子供を行かせてから心配ばかりでしたが、やっぱり行かせて良かったと思っています。

阿部

この度は大変お世話になりました。私と息子にとってこの8日間の日々は、かけがえのない時間として心と体に記憶されました。福島市に在住している私達にとって「放射能」の問題はずっと付き合っていかなければならないと覚悟はしているものの、

**やはりどこかに「放射能」の事を忘れ人間として当たり前の生活を望んでいるのも確かです。**

八木洋



姉弟と祖母(義母)の3人で参加させていただきました積田です。子供達も行ってよかったという話してくれました。ただ、一番楽しんできたのは、祖母のような……。親孝行もできてよかったです。

積田



3.11震災後の原発人災による放射能災害のせいで、春～夏という季節に反して長袖・マスクの着用を強いられ、外で遊ぶことを禁じられた子供達は、

**福島キッズの初日、マスクをせずに駆け回り、自由に緑の大地に触れることができた、あの感動を決して忘れることはないでしょう。**

ほのか

**子供達だけでなく、フクシマで待つ私たち家族にとってもこの経験、人とのつながりは貴重な宝です。**

キンババ



温かく迎え入れてくださった北海道の皆様へ感謝を伝えたいのですが、なかなか良い言葉が見つかりません。ありがとうございました。

駅で再会したとき小1の下の娘は泣いており、20日間は少し長すぎたかと思いましたが、帰りの車の中で一緒に参加した兄と我先にと北海道での思い出を話しているうちに安心したのか「また行きたいな…」とボツリと言いました。きっとこれが本心なんだろうね。

横山

お世話になり、ありがとうございました。今日は、2学期の始業式です。子どもたちは元気に登校してきました。たくさんの北海道での思い出を胸に秘め、また子ども達はここ、福島で生活していきます。

**また、日常の始まりです。どうか、この子ども達の未来が、明るい未来でありますように!**

K-MAMA



本日裕一郎が帰ってきました。少し日に焼け、男らしく無口になって…。喜んでおりましたら、帰路にて発熱。救急外来へ行き、先ほど帰宅しました。

解散時に、「子供達疲れていますから、ゆっくり休ませてあげてください、思い出の話は後々に…」とありましたが、まさにその通り。頑張ってきた証でしょうね。リーダーさんからの手紙は、一人ひとりに書いてくださったのです。数日の間で、息子の事を理解しようとしてくださったご苦労が見えるようでした。ありがとうございました。引率のボランティアの方の涙は本当にご苦労と、この先の生活を思いやりの事なのでしょうね。泣かないと決めてきた私も、ウルウルしてしまいました。本当にありがとうございました。ポンタ様。息子からです。

**「移動が長くて大変だったけど、またみんなに会いたい。だから、今度も行かせてね」と…。**

まだ何も旅の想いでは語ってくれませんが、この言葉が全てを物語っていると思うのです。この先の人生に、大きな勇気を頂いたことを、決して忘れません。ありがとうございました。

田仲

ずっとマスクをつけていた子ども達にも、「風邪ひいているの?何故マスク外さないの?」と聞くも「ここ放射線ないの?」と子ども達は聞き返し、放射線がないことを知った瞬間、すぐにマスクを外し深呼吸しました。この様子を傍で見ていて、原発が与えた影響と被害者の方々の気持ちを強く感じました。子供の世話をすることは、大変でしたが子供たちの笑顔を見る度に、どんなに疲れていても頑張ることができました。今回の経験で専門的なことや日本語以外にも日本の文化と日本人に対する理解を深めることができました。

ボランティア/フー ワンイン(留学生)

**本日娘が3週間ぶりに帰ってきました。すこし背がのびてたくましくなったような気がします。**

H&H



それは電車に乗っていて、窓から海が見えたときのことです。私たちが学生や子どもたちは「キレイ!」と驚いていました。しかし一人の子だけ泣きそうなので「津波がくる」と言っていました。震災は、子どもたちの心をここまで傷つけているのだと、すごく悲しい気持ちになりました。

ボランティア/伊藤 澄香

# 福島の子どもたちを北海道の大地が多くの人たちが抱きしめた!



帰りの電車で子供が「東京が謝らないから、東京が嫌い」という言葉に唖然しました。

ボランティア/オウ キ(留学生)

実際に福島や仙台の子ども達と触れ合ってみると、現地や津波、放射能に対する恐怖心等がかなりありました。例えば、泊まったコテージの天然水を何度も何度も気にしたり、外で遊ぶときはマスクをつけなくても大丈夫なのかと聞かれたりすることも少なくありませんでした。震災当時の出来事などは、ほぼ毎日話していました。

ボランティア/東田 穂波

子供たちの「おうちに帰りたい」という言葉には、本当にどう返したら良いのかわかりませんでした。いくら急な環境でも、慣れないところや、お母さんやお父さんがいないところだから不安がつつのるものもありました。参加した子供の中にも、低学年の子どもたちはよくがんばったと思います。私もふくしまキッズに参加して、子供たちから目に見えない何かをたくさんもらいました。

ボランティア/津田 めぐみ



今日娘が元気に帰ってきました。家への車中では、北海道の楽しかった思い出をずっと喋りっぱなしでした。もうすぐいよいよ着くという頃に、「北海道ではマスクなしで草の上でゴロゴロしたり、走ったりできたのにまた出来ないんだね」とボツリと言ったので、私は、草の上はもう少し我慢しようねと言え。

**「今までは分からなかったけど、草をむしると何か安心する匂いがするんだよ。また北海道に行きたいな」と言いました。**

本田



我が子はボランティアの大学生と離れなくなかったと深していました。それ程の経験をしてきたんだと、こちらも胸が熱くなりました。

**大人になったら自分もボランティアに参加したいと言っております。**

渡辺

皆様ありがとうございます。感謝の気持ちでいっぱいです。

北海道は家族で大好きで、何度か観光で行っておりますが、稚内は私が独身時代に行ったときで…まさか息子が行くことになるとはびっくりしました。写真を見て昔を思い出し、同じ風景を息子と共有できると思ううれしさがこみ上げます。息子がたどった道を今度は家族で行きかせてもらいます。皆様の熱いご支援に心よりお礼申し上げます。

原田

**疲れているはずなのに、話がつきないので、強制的に寝かせました。明日続きを聞きたいと思えます。**

リジン&シオン母

